法然における助業についての一考察

大谷派　杉浦道雄

はじめに

法然教学において念仏と助業は、先学より常に論じ続けられる課題である。法然の助業観について先学は、様々な表現をもってその位置を明かすが、助業について、念仏の助成としてのはたらきをどのような形をもって解すべきか常に課題となる。そこで重要なのは、法然はどのような立場において助業のはたらきを認めたのかという点である。換言すれば、念仏の加行として往生業因としてのはたらきを助業に認められたのか、或いは方便行としてそのはたらきを認められたのか。さらに、どのような意味において方便行であるのか。これらの点を中心に、考察を試みる事と目的とする。

法然の諸行観、特に助業については近年においても様々な議論がなされている。その要点を整理すれば次の通りである。

藤堂恭俊は『法然上人研究』で「雑行を往生浄土の実践体系のなかに組み入れたことであり、雑行に往生浄土の行という任務・役割を与えたことを意味する。(1)」

安井廣度は『真宗七祖の教義概要』で「元祖もやはり諸行の往生を認められたので、或時は「本願の念仏にはひとりだちをさせて助をささぬ也、助さす程の人は極楽の辺地に至る」といい、[2]」

浅井成海は『法然教義より親鸞教義への継承と展開』で「廃・助・傍の三義の中で説く助成、傍正の義は「二行章」で明示した諸行廃捨の立場より、むしろ念仏一行専修を成ずるために、諸行の働きをみとめていく主張が示される。廃捨された諸行も別の見方を立てば、同類の助業、異類の助業とも念仏を修する助業としてみとめられることを示す。あくまでも廃立の基本線を貫きながら、なお諸行に種々の理解があることを認めていくのである。[3]」

平雅行は『日本中世の社会と仏教』で「選択本願念仏説では極楽往生を望む行者にとって、称名念仏が唯一の絶対価値的行為なのであって他の一切の行は往生行手段としては全く無価値になったのである。[4]」

他にも、諸行に往生業としてのはたらきを認めていたかについて、多くの論証がなされている。

本稿は次の二点を中心とし、念仏と助業の関係性について考察を試みる。

①法然の助業観について、五番相対の中「不回向回向対」に依り考察を試みる。

②法然は助業について「同類の助成」と「異類の助成」の二種を明かすが、その助成性について考察をし、さらに助業を伴う念仏者と正定の業の念仏者は等しく往生するのか考察を試みる。

以上二点を中心課題とし、『選択本願念仏集』（以下『選択集』）に依りながら助業のはたらきについて考察を試みる。

一、正雑二行

まず、法然における助業の展開について、その要点を確認する。法然の回心は『源空聖人私日記』によれば、四十三歳の時である。善導『観経四帖疏』（以下『観経疏』）の

一心専念弥陀名号、行住坐臥、不問時節久近、念念不捨者、是名正定業。順彼佛願故。

の一節に照らされ、自らの求めていたものがすでに如来の側に用意されていることに気付かされたのである。善導の言葉により「たちどころに」（『十六門記』）余行を捨てて専修念仏門に入った法然は、どこまでも善導に依りながら念仏一行を顕かにされた。その中でも重要なのは正雑二行である。しかし、法然は善導に依りながら正行を立て、雑行を廃す事を明かしながらも、助業については明確でない部分が残る。法然における正雑二行について考察する前に、善導に依り正雑二行の要点について確認をする。

善導は「散善義」深信釈下に、就人立信と就行立信を挙げる。正雑二行は、就行立信に明かされる実践行論である。その文を挙げれば次の通りである。

次就行立信者、然行有二種。一者正行、二者雑行。言正行者、専依往生経行行者、是名正行。何者是也。一心専読誦此『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等、一心専注思想観察憶念彼国二報荘厳、若礼即一心専礼彼仏、若口称即一心専称彼仏、若讃歎供養即一心専讃歎供養、是名為正。(5)

ここに明かされるように、読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五正行は、浄土三部経の中でも特に『仏説観無量寿経』（以下『観経』）に説かれる往生行をまとめたものである。この根拠となるのは、善導の『観経』観である。即ち、『観経』に釈迦の教（要門）と弥陀の経（弘願）を見て、要弘二門としてその意を判ずるものである。即ち、

釈迦は浄土の教えを聞くべき機に要門を説き、弥陀は弘願を顕彰するのである。このように、善導が要弘二門の判を立てた背景について窺えば、聖道の諸機を誘引するはたらきを認めているからである。ここに『観経』に依り判じられた要門は観仏三昧であり、弘願は念仏三昧である。これが行判においては、正雑二行として判じられる。

法然はこのような善導の念仏義を伝承し、その称名正定業論を徹底し、体系的に開顕された。その法然の展開について確認する。

法然の正雑二行について『選択集』により考察する。第二章は、『観経疏』就行立信釈により念仏と諸行との二つに分け、五番相対によってその得失を判ず。さらに『往生礼讃』百即百生釈を引き念仏に帰すべきことを明かす。まず、

善導和尚、立二正雑二行一、捨二雑行一帰二正行一之文

と、法然の立場が定義され、正行と雑行の二行を立てて、正行を立て雑行を廃すことが明かされる。その正行について次のように説かれる。

初正業者、以二上五種之中第四称名一、為二正定之業一。即文云下「一心専二念弥陀名号一、行住坐臥不レ問二時節久近一、念念不レ捨者、是名二正定之業一。順二彼仏願一故」上是也。次助業者、除二第四口称一之外、以二読誦等四種一、而為二助業一。即文云下「若依二礼誦等一、即名為中助業」上是也。(6)

ここに明かされる正行が正定業であり、本願の念仏である。この正定業以外、前三後一（読誦・観察・礼拝・讃嘆供養）をもって助業とする。

二、助業

法然の目的は、一切衆生の救済である。その救済の法が、阿弥陀により選択された正定の業である念仏一行である。この選択について「三選の文」に次のように明かされる。

夫速欲レ離二生死一、二種勝法中、且閣二聖道門一、選入二浄土門一。欲レ入二浄土門一、正・雑二行中、且抛二諸雑行一、選応レ帰二正行一。欲レ修二於正行一、正・助二業中、猶傍二於助業一、選応レ専二正定一。正定之業者、即是称二仏名一。称名必得レ生、依二仏本願一故。(7)

このように、浄土門に対し聖道門をさしおい（閣）て、正行に対し雑行をなげすて（抛）て、正定業に対し助業はかたわら（傍）にしてと示される。いかなる衆生をも摂取し救済する事にこそ、選択本願の念仏が開顕される意義が存在し、ここに三度の選択によって「仏の本願によるがゆえなり」の根拠のもと、正定業としての念仏が明かされる。一方で、「傍らに」といわれるのが助業である。

助業とは、五正行中の読誦・観察・礼拝・讃歎供養である。法然は五正行について、『観経疏』を引用し「二行章」に次のように明かす。第一に読誦について、

一心専読二誦此『観経』『弥陀経』『無量寿経』等一、

と、浄土の経典を読誦することを明かし、第二に観察について、

一心専二注思三想観四察億五念彼国二報荘厳一、

と、阿弥陀仏とその浄土のすがたを観察することを明かし、第三に礼拝について、

若礼即一心専礼二彼仏一、

と、阿弥陀仏を礼拝することを明かし、第四に称名について、

若口称即一心専称二彼仏一

と阿弥陀仏の名を称することを明かし、第五に讃嘆供養について、

若讃歎供養、即一心専讃嘆供養、[8]

と、功徳を讃え供養することを明かす。善導は、読誦・観察に「一心専」・「一心専注」と明かす事に対し、礼拝・称名・讃歎供養においては「若」と明かす。これにより開門五種[9]において、善導は念仏三昧より観察三昧に重きを置くことがわかる。さらに観仏三昧において読誦は観察の方便行であり、礼拝は称名の加行[10]であり、讃歎供養は観仏・念仏両三昧にかかる往生行である。

法然は「二行章」に善導の引文により五正行を明かし、さらに私釈を設け、読誦正行・観察正行・礼拝正行・称名正行・讃歎供養正行の五正行を組織化された。五正行についての法然の私釈については次の通りである。第一に読誦正行について、

第一読誦正行者、専読二誦『観経』等一也。即文云三「一心専読二誦此観経・弥陀経・無量寿経等一」是也。

と明かし、第二の観察正行について、

第二観察正行者、専観二察彼国依正二報一也。即文云六「一心専二注思三想観四察憶五念彼国二報荘厳一」是也。

と明かし、第三の礼拝正行について、

第三礼拝正行者、専礼二弥陀一也。即文云三「若礼即一心専礼二彼仏一」是也。

と明かし、第四の称名正行について、

第四称名正行者、専称二弥陀名号一也。即文云三「若口称即一心専称二彼仏一」是也。

と明かし、第五の讃歎供養正行について、

第五讃歎供養正行者、専讃歎供養弥陀也。即文云「若讃歎供養即一心専讃歎供養是名為正」是也。[11]

と明かす。法然においては、五正行総てに「専」と明かす。開門五種正行を明かした後、合門二種[12]を明かす。

次合為二種者、一者正業、二者助業。初正業者、以上五種之中第四称名為正定之業。即文云「一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業。順彼仏願故」是也。次助業者、除第四口称之外、以読誦等四種、而為助業。即文云「若依礼誦等即名為助業」是也。[13]

称名は仏の願に順ずるがゆえに往生の業因として認められる。助業は単体では諸行往生として機に対応するものでなく、念仏を助成するものである。その助成性が課題と為り続けているのである。

三、「正助二行」と「正助二業」についての一考察

法然は善導に依り、雑行をなげすてて正行に帰すことを明かす。また正行について正定業の念仏と助業とに分け、正定業に対し助業はかたわらにと示す。ここに明かされる正行即ち正業と助業について、法然は正助二行と正助二業の二種の語をもって明かす。法然は同意語である正助二行と正助二業をどのような根拠の基づき、使い分けたのか考察を試みる。

法然は「二行章」において五正行に対し五種の雑行を示し、五番相対によりその得失を判ず。五番相対において正行について五番共に「修正助二行者」と明かす。正定業である念仏と助業について明かすにあたり、五番相対では正助二業ではなく正助二行と述べる。まず、「二行章」の『観経疏』引文に、

此正助二行已外自余諸善悉名雑行。若修前正助二行、心常親近憶念不断、名為無間也。[14]

と述べる。また、五番相対においても正助二行と述べる。しかし同じ『選択集』の中、三選の文においては、

欲修於正行、正・助二業中、猶傍於助業、選応専正定。[15]

と述べる。同じ『選択集』の中、正定業の念仏と助業を明かすに当たり、法然は二種の語を使い分ける。このような使い分けは、他にも見ることができる。『津戸三郎へつかはす手紙』には、

又専修につきて五種の専修正行といふ事あり。この五種の正行につきて、又正助二行をわかてり正業というは五種の中に第四の念仏也。助業といふはその中四つの行也。いま決定して浄土に往生せんとおもはゝ、専雑二修の中には、専修の教によりて一向に念仏をすへし。正助二業の中には、正業のすゝめによりて、ふた心なくたゝ第四の称名念仏をすへしと申し候しかは、くはしきむね、深き心をしり候はす。[16]

と述べる。傍線部分に述べられる正助二行は、五正行について善導に依りながら「順彼仏願故」を根拠とし念仏が選ばれる行判であり、換言すれば「二行章」に明かされる開門五種正行である。

点線部分に述べられる専雑二修は、「いま決定して浄土に往生せんとおもはゝ」とのうえに念仏を明かす。専修と雑修について法然は、『津戸三郎へつかはす手紙』に、

専修といふは念仏也。雑修といふは念仏のほかの行也。[17]

と明かす。このように、専修の者は念仏の行者であり、雑修の者は助業・雑行の者である。ここで雑修の者は助業が単体では往生の業因を有しない為、往生が千人中一人とその困難さについて示す。ここに「いま決定して浄土に往生せんとおもはゝ」と正行（専修）と雑行（雑修）の二修より念仏を明かす。

波線部分に述べられる正助二業は、「二行章」合門二種に明かされる正業と助業であり、「正業のすすめ」により称名念仏が勧められる。

このように開門五種正行に開かれた正助二行と合門二種に明かされる正助二業について、その使い分けについて窺うと、正助二行と正助二業の間に専雑二修が明かされ、「いま決定して浄土に往生せんとおもはゝ」とのうえに

念仏を明かす。正助二行と正助二業の間に明かされる「決定」に注意すべきである。法然は往生決定について『三心料簡および御法語』に、

一弥陀本願決定也、二釈迦所説決定也、三諸仏証誠決定也、四善導教釈決定也、五我等信心決定也。以此義故往生決定也。[18]

と五決定を明かす。『津戸三郎へつかはす手紙』に明かされる処の正助二行は、五決定の中「四善導の教釈決定」である。善導に依り、五正行中から念仏を明かす行判である。次に正助二業は、「五は我等が信心決定」である。即ち、善導により開門五種が明かされ、「いま決定して浄土に往生せんとおもはゝ」とのうえに念仏を明かし、念仏が如来に選択された根拠について正助二業の元、正定の業を明かすものである。法然は善導により明らかにされた行判即ち正助二行について、念仏の純粋性を如来選択を根拠とし、正定業と助業という正助二業として顕かにされた。

このように法然は正助二行と正助二業について慎重に使い分けをしながら、念仏と助業の関係性について明らかにされたと考える。

四、五番相対における法然の助業観

『選択集』「二行章」に正雑二行の得失について、五番相対をもって挙げる。

次判二行得失一者、「若修二前正助二行一、心常親近、憶念不レ断、名為二無間一也。若行二後雑行一、即心常間断、雖レ可二廻向得一レ生、衆名二疎雑之行一」即其文也。案二此文意一、就二正雑二行一、有二五番相対一。一親疎対、二近遠対、三有間無間対、四廻向不廻向対、五純雑対也。[19]

五番相対が善導五正行に対し、法然の領解を明かすものであることは、先学により既に指摘されるところであるが、五番相対において注意すべき点は、「正助二行」の使い方である。正行について明かすにあたり五番共に「正助二行を修するものは、」と明かす。即ち正行と雑行を相対的に扱いながらも、正行の中に助業を含めている点に注目をし考察を試みる。五番それぞれについて、その要点を確認すれば次の通りである。まず親疎対の「親」について、

衆生起行、口常称レ仏、仏即聞レ之。身常礼二敬仏一、仏即見レ之。心常念レ仏、仏即知レ之。衆生憶二念仏一者、仏亦憶二念衆生一。

と正助二行を修する者が阿弥陀仏に親昵たることを『観経疏』に依って明かす。「親」に対し「疎」について、

次疎者雑行也。衆生不レ称レ仏、仏即不レ聞レ之。身不レ礼レ仏、仏即不レ見レ之。心不レ念レ仏、仏即不レ知レ之。衆生不二憶二念仏一者、仏不二憶二念衆生一。

と雑行が疎行である所以を明かす。第二に近遠対の「近」について、

衆生願レ見レ仏、仏即応レ念現在二目前一。故名二近縁一也。

と正助二行を修する者が阿弥陀仏に隣近なることを『観経疏』に依って明かす。「近」に対し「遠」について、

次遠者、雑行也。衆生不レ願レ見レ仏、仏即不レ応レ念不レ現二目前一。

と雑行が遠である所以を明かす。第三に無間有間対の「無間」について、

無間者、修二正助二行一者、於二弥陀仏一憶念不二間断一。

と正助二行を修する者が阿弥陀仏において憶念間断せずと明かす。「無間」に対し「有間」について、

次有間者、修二雑行一者、於二阿弥陀仏一憶念常間断。

と雑行を修する者は憶念つねに間断すと明かす。第四の不回向回向対については後に考察する。第五の純雑対の

「純」について、

先純者、修二正助二行一者、純是極楽之行也。

と正助二行を修するは極楽の行であることを明かす。「純」に対し「雑」について、

雑者是純非二極楽之行一。通二於人天及三乗一亦通二於十方浄土一。[20]

と極楽の行に非ずことを明かす。

五番共に、念仏の徳を明かすものであるが、その中でも重要であるのは不回向回向対である。その回向義の重要性こそが、門下に種々異義を派生させた所以でもある。また、本願章に深く関与する問題でもある。助業さらに諸行に関する問題について特に五番相対の中、不回向回向対において顕著である。これによれば諸行も往生行であり、回向すれば往生の因となることが明かされる。ここに念仏と諸行に議論が生ずる事となる。不回向回向対は、

第四不廻向廻向対者、修二正助二行一者、縦令別不レ用二廻向一、自然成二往生業一。

と述べ、善導の「玄義分」六字釈を引用する。

故疏上文云。「今此観経中十声称仏、即有二十願・十行一具足。云何具足。言二南無一者、即是帰命、亦是発願廻向之義。言二阿弥陀仏一者、即是其行。以二斯義一故、必得二往生一。」（已上）

さらに、回向義を釈し、

次廻向者、修二雑行一者、必用二廻向一之時、成二往生之因一。若不レ用二廻向一之時、不レ成二往生之因一。故曰レ雖レ可二廻向得一レ生是也。[21]

と述べる。即ち、正助二行の者は回向を用いなくとも自然に往生の因となるが、雑行の者は回向を用いなければ往生の因とならないと述べるのである。

雑行の者について回向を用いなければ往生の因とならないことは、既に明らかにされるところである。ここで問

題となるのは、正助二行の者について不回向をもって往生の因となると明かす点である。正助二行とは、五正行中の念仏と前三後一の助業である。ここに回向を用いずとも自然に往生の因となる不回向の義が明かされるが、それに該当するのは五正行中、正定業である念仏のみである。ここに助業の業因について問題が生ずる。念仏は正定業であるが故に不回向である。ここで不回向の義を明かすにあたり、「正助二行の者は」と述べるによれば、助業も不回向に含まれる事と為る。しかし、助業は正定の業ではない為それ自体に直接的な往生の因はないが、念仏の助としてのはたらき、即ち間接的な往生の因については認められると考える。法然は何故、「念仏を修する者は」或いは「正業を修する者は」などといわずに「正助二行の者は」といわれたのであろうか。

五番相対の中、不回向回向対と他四番を比較すると「正助二行」の意に異なる点がある。それは「正助二行」の後に引かれる善導の文に窺うことが出来る。不回向回向対においては善導六字釈が引用されるが、「正助二行」といいながらも六字釈は助業に関わることのないものである。即ち、不回向回向対においては善導にならい「正助二行」といいながらも、不回向の根拠として善導六字釈により助業を除いた正定業たる念仏一行を明かす為のものである。即ち不回向回向対に明かされる念仏と助業の関係は、念仏については不回向であり自然に往生の業となる。これに対し助業は、「正助二行」とあるが、六字釈をもって念仏のみが明かされる為、後の回向を用いる雑行に含まれると考えるべきであろう。

善導によりながら「正助二行」と述べ、六字釈をもって正定の業たる念仏一門に限定をし、雑行が往生の因となり得る業作としての回向を明かすことに助業を含めたと考える。法然は善導の念仏義を継承しながらも、不回向の義をもって念仏が正定の業たる根拠を示し、さらに念仏一行に帰すことを明かしたのである。

五、同類・異類の助成

「三輩章」において、往生の機に三輩の別のあることが明かされ、廃立をもって諸行と念仏の関係を問題とし批判をしている。

凡如レ此三義、雖レ有二不同一、共是所二以為一向念仏一也。初義即是為二癈立一而説。謂諸行為レ癈而説、念仏為レ立而説。次義即是為二助正一而説。謂為レ助二念仏之正業一而説二諸行之助業一。後義即是為二傍正一而説。謂雖レ説二念仏諸行二門一、以二念仏一而為レ正、以二諸行一而為レ傍。故云二三輩通皆念仏一也。但此等三義殿最難レ知。請諸学者、取捨在レ心。今若依二善導一以レ初為レ正耳。(22)

このように、廃・助・傍をもって諸行と念仏の関係が明かされる。

法然は諸行について、「三輩章」に廃・助・傍が明かされる中、助において同類と異類の二種の善根を明かす。

二為二助二成念仏一説二此諸行一者、此亦有二二意一。一以二同類善根一助二成念仏一、二以二異類善根一助二成念仏一。(23)

と諸行について同類の善根と異類の善根を明かす。まず同類の善根について、

初同類助成者、善導和尚『観経疏』中、挙二五種助行一、助二成念仏一行一是也。具如二上正雑二行之中説一。(24)

と、同類の善根について善導に依り五正行中の前三後一の助業であると明かす。同類の助業は、善導により明かされる五正行中の前三後一の助業である。法然は善導の念仏義を伝承するにあたり、「二行章」において「散善義」の就行立信の文、並びに『往生礼讃』の専雑の得失の文それぞれに私釈を設け、善導の念仏を伝承しながらも、さらに詳細に解明した。即ち、法然は正雑二行・正助二業に関し善導の行論をそのまま伝承をしている。その中、『観経』に説かれる往生行に関して善導が体系化されたのが読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五正行である。

この五正行の中、読誦・観察・礼拝・讃歎供養を助業とし、称名念仏を正定業とした。

次に異類の助業について考察をする。異類の善根について、

次異類助成者、先就上輩而論正助者、「一向専念無量寿仏」者、是正行也。亦是所助也。「捨家棄欲而作沙門発菩提心」等者、是助行也。亦是能助也。謂往生之業念仏為本故為一向修念仏、捨家棄欲而作沙門、又発菩提心等也。就中、出家発心等者、且指初出及以初発。念仏是長時不退之行、寧容妨礙念仏也。中輩之中、亦有起立塔像・懸繒・燃灯・散花・焼香等諸行。是則念仏助成。也其旨見『往生要集』。謂助念方法中方処・供具等是也。下輩之中、亦有発心、亦有念仏。助正之義、准前可知。(24)

と三輩それぞれについて明かされるものである。まず上輩については、家を捨て欲を棄て沙門と作りて菩提心を発すと説かれる。次に中輩については、『往生要集』助念方法に説かれる諸行であり、起立塔像・懸繒・燃灯・散花・焼香等の諸行であり、下輩においては無上菩提心をあげる。三輩それぞれに共通して念仏を正行としながら、上・中・下輩それぞれに機類に相違があり、諸行が機類それぞれに通じないことも明らかである。

また次のような助業も異類の助業に含まれる。『禅勝房伝説の詞』に、

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち自身安穏にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業なり。(25)

といわれる。同類の助業、即ち五正行中の助業以外の助業について異類の助業という立場である。また『十二問答』においても衣食住を助業といい、さらに

すべて是をいはば、自身安穏にして念仏往生をとげんが為には何事もみな念仏の助業也。(26)

とさらに広く明かす。

藤堂恭俊氏は、二種の助業について「同類の助業」を「三選の文」における「傍」の助業であり、「異類の助業」

については「抛」であり、正行に対する雑行であると指摘している。この前提の下、「異類の助業」について、

異類の善根を念仏の一行に徹する機縁・契機となし得る念仏者について、「我身乗仏本願之後、決　定生信起之上結縁他善事全不可為雑行」（醍醐本「或時遠江国蓮花寺住僧禅勝房参上人奉問種々之事上人一々答之」）と指摘されるように決定往生の信を確立した者こそが、異類の善根をもって念仏の一行に徹する契機・機縁となし得ることが知られる。このように決定往生の信を持つ者にとって、「衣食住の三は念仏の助業也」（禅勝房伝説の詞―『黒谷上人語灯録』巻第十五）というように衣食住をも異類の善根とみなし、念仏の一行に役立てている。[27]

このように、藤堂氏は異類の助業について、三輩それぞれの異類の善根を明かす中、上輩に明かされる「家を捨て欲を棄て沙門と作りて菩提心を発す」という出家あるいは発菩提心が目的ではないが、異類の助業として念仏の一行を助成することとなり、決定往生の信を持つ者にとっては衣食住さえも念仏の助業となると指摘している。

藤堂氏は、異類の助業の中、出家と衣食住の助業を分けて考察を進め、出家について決定往生の信より前の業因とし、衣食住の助業についてはその後の業因としている。決定往生の信を確立するということは、仏の本願に順ずる不回向の行として成立するものである。不回向の行ではない助業についてその業因性が課題となる。

また決定往生は正定の業である念仏のみが業因となる事は明らかであり、異類の助業に往生の業因を認めるならば、決定往生の信を確立した後ではなく、前と考えられる。

法然教義は、すべての衆生が摂取し救われていく事が前提である。その意味において、異類の助業に業因を認めるとき、民衆と向き合った法然であるからこそ教えに触れる機縁も与えられない人々に方便行としてどのような業因性を有していたのか、その事例を法然と民衆（漁師）との問答に窺う。『法然上人行状絵図』に、

わが身はこの浦のあま人なり。おさなくよりすなどりを業とし、あしたゆふべに、いろづくの命をたちて、世をわたるはかりごとす。ものの命をころすものは、地獄におちてくるしみたえがたく侍なるに、いかがしてこ

れをまぬかれ侍るべき、たすけさせ給へ。[28]

と法然は問われ、

汝がごとくなるものも、南無阿弥陀仏をとなふれば、仏の悲願に乗じて浄土に往生すべき

と答えた。ここに示される漁師の問いは、自らの罪の懺悔である。仏の本願に照らされた時、自らの深く重い罪の自覚がそのまま救いへと転換され、漁師を続けながら念仏を称える念仏者となったのである。漁という生活そのものの罪が、救いへ転じる為の方便となった事例である。この方便は、まさしく衣食住をも含む異類の助業である。同類の助業も含め、異類の助業もそのものが目的でない。正定業の念仏へ誘引性をもつ方便行である。その意味において、信心獲得前の異類の助業の業因は認められるべきであると考える。

次に『選択集』・『無量寿経釈』に明かされる三種の往生について考察する。善導の『観念法門』により、念仏往生・助念往生・諸行往生が説かれる。何れの往生にも「一向」の言葉が使われる事について『無量寿経釈』に、

謂上品説二一向専念無量寿仏一、乃至下品説二一向専念無量寿仏一。凡唯二余所一、云二一向一者不レ兼二余行一意也。[29]

と、三輩共に、余行を兼ねることの無い念仏往生であると明かす。ここに示される余行とは、同類・異類の両助業である。一向とは、廃立の義による唯称名念仏一行である。よって、五正行中の助業であっても、異類の助業であっても、往生の業因として念仏の加行となることは無い。しかし、方便行としての業因について、決定往生の信を獲得する前においては認められるべきであると考える。

これについて『無量寿経釈』に次のように明かす。

依レ之案レ之、今三輩文、有二但念仏義一、有二助念仏義一、亦有二諸行往生義一。仏以二一音一演二説法一、衆生随レ類各得レ解。仏意多含也。今且作二三解一。[30]

このように、三輩共に念仏往生であり仏は一音で説かれているが、機根がそれぞれにおいて得ている。機根は

様々であるから仏が一音で説かれたものが三義となるのである。この仏意こそが、念仏往生へ誘引せんがための方便行として開かれた諸行であり助業である。これについて、『一期物語』には、

念仏往生之外皆為二方便説一也[31]

と明かされる如く、加行ではなく決定往生の信より前の方便行としてそのはたらきを認めるべきと考える。

六、助業と化土

次に、助業と化土の関係について考察を試みる。法然は『和語燈録』に、

又云、本願の念仏には獨り立ちをせさせて助をささぬ也、助さす程の人は極楽の返地に生る[32]

と明かす。このように、往生業因の為に助業を修するものは、極楽の辺地に生れると云われることから、化土往生について認められている。さらに『無量寿経釈』には『群疑論』の文を引き、

雑修之者、萬不二一生一、専修之人千無二一失一。即此経下文言、何以故、皆由二懈慢執心不一牢固一。是知、雑修之者為二執心不牢人一、故生二懈慢一也[33]。

と明かす。このように、化土について明かすが特に詳細な解明はなされていないが、助業を修する者は化土に生まれると明かす。

しかし法然は善導により、「千中五三」「千中一二」「千中無一」など、諸行の報土往生を否定している。また『和語燈録』に、

問うていわく、称名念仏申す人は、みな往生すべしや。答えていわく、他力の念仏は往生すべし、自力の念仏はまたく往生すべからず。

とある。ここに云われる「他力の念仏」は正定業の称名念仏であり、「自力の念仏」は助業を伴う念仏である。即ち、助業を伴う念仏は往生が不可能であるといわれるのである。

法然は諸行往生を全否定しているわけではない。すべての衆生が救われるべき道を求めた時、諸行往生は往生の業因として時機不相応であった。ここで往生不可能といわれる「自力の念仏」は自力の信を因とするものである。自力の信において第十九・二十願を信じ念仏するものに、加行・方便行としての助業が伴ってきたときに、助成の業因となり願力によって化土に生れる事となる。

法然は自力の念仏による往生について明確に不可能としており、助業について化土往生と明かす。これは決して助業に往生の業因を認めるというものではない。『無量寿経釈』に、

此経三輩中説二助念及諸行一、後流通中、廃レ之唯明二念仏一。其次第似二観経一。観経中、先広逗二機縁一、説十三定善、三福九品之業一明二諸行往生一。[34]

と明かされるように助業のはたらきは、往生の業因としての加行ではなく、機縁を逗めるために説かれた方便としての加行、即ち業因である。よって、法然は化土についてその詳細を明かすことが少なく、機について明かした。これにより「他力の念仏」による往生のみであることが明確になるのである。

結論

助業について、その業因性と化土往生との関係性の二点を中心に考察を試みた。諸行、とりわけ助業については先学により多くの議論がなされる。その根底に介在する相違点は、法然門下における諸行についての思想的相違に依るものが大きい。本稿は法然門下においても親鸞の宗教思想確立に多大なる影響を与えた法然について考察を試

みたものである。

法然は諸行往生について認めながらも、時機不相応であるとし但念仏往生であるとの如来の選択を明かされた。よって、助業について往生の業因は認めることはないと考える。さらに加行として往生の業因ともならないと考える。あくまで方便行として認められるものであり、往生の業因は純粋なる正定業の念仏のみである。

しかし、方便となって開かれるとき、異類の助業を含め多くの形をもって誘引するはたらきを認めることができる。即ち、「機縁を逗める」はたらきであると考えられる。

註

(1) 藤堂恭俊『法然上人研究二』(山喜房仏書林、一九九六年)

(2) 安井廣度『真宗七祖の教義概要』(法藏館、初版一九三五年、重版一九五二年)三三四頁

(3) 浅井成海「法然教義より親鸞教義への継承と展開」(浅井成海編『法然と親鸞―その教義の継承と展開―』、永田文昌堂、二〇〇三年)三五頁

(4) 平雅行『日本中世の社会と仏教』(塙書房、一九九二年)

(5) 『真宗聖教全書』第一巻、五三七～八頁

(6) 『真宗聖教全書』第一巻、九三五頁

(7) 『真宗聖教全書』第一巻、九九〇頁

(8) 『真宗聖教全書』第一巻、九三四頁

(9) 開門五種正行は、先学において「開門の釈」と指摘される。即ち、善導が五正行を立てた経過について明かす事を指すものであり、読誦・観察を観仏三昧より設け、礼拝・称名を念仏三昧より設け、讃嘆供養については、観仏念仏両三昧に通ずるとする。

(10) ここでは礼拝を称名の加行とする。即ち、『観経』に「合掌又手南無阿弥陀仏」とあるように礼拝により称名が行じられると、安井廣度氏(『真宗七祖の教義概要』)などが指摘している。

(11) 『真宗聖教全書』第一巻、九三五頁

(12) 合門二種正行は、先学において「合門の釈」と指摘される。即ち、念仏三昧為宗の己證を表すものであり、五種の中称名を正定業とし前三後一を助業とする。

(13) 『真宗聖教全書』第一巻、九三五頁

(14) 『真宗聖教全書』第一巻、九三四頁

(15) 『真宗聖教全書』第一巻、九九〇頁

(16) 『昭和新修　法然上人全集』五六八頁

(17) 『昭和新修　法然上人全集』五六八頁

(18) 『昭和新修　法然上人全集』四五二頁

(19) 『真宗聖教全書』第一巻、九三六頁

(20) 『真宗聖教全書』第一巻、九三七頁

(21) 『真宗聖教全書』第一巻、九三七頁

(22) 『真宗聖教全書』第一巻、九五一頁

(23) 『真宗聖教全書』第一巻、九四九頁

(24) 『真宗聖教全書』第一巻、九五〇頁

(25) 『昭和新修　法然上人全集』四六三頁

(26) 『昭和新修　法然上人全集』六四一頁

(27) 藤堂恭俊『法然上人研究二』八頁

(28) 井川定慶編『法然上人伝全集』一三〇頁

(29) 『昭和新修　法然上人全集』八八頁

(30) 『昭和新修　法然上人全集』九〇頁

(31) 『昭和新修　法然上人全集』四四八頁

(32) 『昭和新修　法然上人全集』四六二頁

(33) 『昭和新修　法然上人全集』八六頁

(34) 『昭和新修　法然上人全集』九一頁